

神奈川県議会の皆さんが来訪 「森林生態系保護の取り組み」などを調査

9月2日（火）に、神奈川県議会環境農政常任委員会（大木委員長）から委員12名、随行者3名が、定例議会閉会中の調査事件「森林整備保全対策について」に関する調査を目的として来訪されました。

午後3時過ぎに皆さんがセンターに到着すると、2階のセミナー室において、所長から、センターの業務内容、森林生態系保護地域、緑の回廊、植生推移などについて、映像を交えて説明しました。

続いて、近くの「以久科原生花園」に移動し、斜里岳、知床連山などを紹介、更に緑の回廊の具体場所などについて説明し、調査日程を終了しました。



冒頭挨拶する大木委員長（左奥）

知床岬地区合同巡視に参加



8月21日（木）に、関係6機関14名による合同巡視が行われ、センターから企画官が参加しました。

知床岬地区は貴重な植物群落や野生鳥獣の生育地であることから、一帯の自然景観を保護するため、「知床岬地区の利用規制指導に関する申し合わせ」（昭和59年2月）により、レクリエーション目的とした一般観光客などの立ち入りを抑制していますが、地理的なこともあり日常的にその実態を十分承知出来得ないことや、立入者に関する情報もあることから、植生等を含めその実態を調査するため実施しました。

当日は、午前7時ウトロ港に集合し、チャータ

ハンゴンソウなどが優占していました
した船で文吉湾（避難港）に上陸しました。

休憩後、環境省自然保護官から、同省で7月中旬から8月中旬までの11日間に実施した立入調査の概要として、①31グループ・108人の立入があった、②立入地点は文吉湾が約8割と圧倒的に多い、③立入手段としては、遊漁船とプレジャーボートが約4割と最も多く、徒歩とシーカヤックが約1割である、④立入目的は釣りが約8割と最も多く、観光が約1割であるなどの説明がありました。

その後、自然保護官ほかの案内で、岬灯台間を巡視しました。途中、たき火の跡があり、立入者がキャンプなどを行っていることが確認されました。また、鹿の食圧などによる植生の変化が著しく、外来種のハンゴンソウ、アメリカオニアザミなどの繁茂が見られました。現地視察を終え、今後の岬地区保全管理のありかたについて資するものと思われま



数が少なくなったガンゴウラン

知床の森から

平成15年9月発行 第85号



北海道森林管理局北見分局 知床森林センター
〒099-4113 北海道斜里郡斜里町本町11番地
電話 01522-3-3009 FAX 01522-3-3160
ホームページ <http://www.siretoko.knc.ne.jp/>



（写真：オジロ岩〈右側〉、フクロウ岩）

知床は今

知床は短い夏が終わり、すっかり秋になりました。鮭や鱒が産卵のため川をあわただしく上っていきます。

知床連山の山々は、イタヤカエデの葉やナナカマドの実が赤く色づいてきて、段々ときれいに変わっていきます。

知床五湖方面とオシンコシンの滝には、大勢の観光客の姿が見られます。

エゾシカ、エゾリス、キタキツネなどの動物たちは、冬に向かって食料の蓄えをしています。

山々が真っ赤に染まるのはもう少し先ですが、秋晴れになると、気持ちよく野外で自然を楽しむことができます。



彩り（10月中旬頃）

photo memory ~ 第48回森とのふれあい



何センチあるかな？



5人がかりで網を巻きました



大きな樹だな～
（本文は次ページ）

第48回 森とのふれあい

「ドングリ調査とイチイ鹿害（網巻）体験」を開催

第48回「森とのふれあい」を、9月20日（土）に、開催しました。

今回は、斜里町立知床博物館（中川 元館長）の『知床海と森の学校』と共同開催の形で行いました。これまでイベントの際に学芸員の方に講師として参加していただいたことはありましたが、企画立案の段階から実行までを一緒に行うのは初めての取り組みでした。参加者は『知床海と森の学校』のメンバーの中の12名（男女同数）で、斜里町内の小学校4年～6年生です。

午前中はウトロの「イチイ林木遺伝資源保存林」で、鹿害対策として網巻きを行いました。まず、職員から①エゾシカが樹皮を食べる理由、②樹皮食害の現状、③イチイ林木遺伝資源保存林の設置目的などについて説明を受けた後、輪尺で胸高直径を測り、必要な網の長さを計算した後、その長さに網を切断し、イチイの幹に巻き付けました。網の高さが1.8mあり身長より高かったため、背伸びしながらの作業となりました。

午後からは、岩尾別に移動し、ミズナラの堅果（ドングリ）を回収しました。まず、職員から①ミズナラの名の由来、②ドングリを食べる動物の種類、③木が子孫を増やす方法などについて説明を受けた後、1m四方のシートトラップからていねいに1個、1個ドングリを拾い上げました。ミズナラの木の個体ごとにドングリの数が違うこと、またドングリの大きさ・重さが1個1個違うことなどを感じ取っていました。

第66回レクリエーション・in知床

『神秘の羅臼湖と五つの沼巡り』を開催

第66回森林レクリエーション・in知床を8月7日（木）に行いました。

目的地の羅臼湖は、標高740mの山に囲まれた場所にあり閑静な隠れた名所です。遊歩道は片道2.6kmで、大小5つの沼や湿原が点在し湿原植物や高山植物を観察することができます。

今回は神秘の湖羅臼湖ということで、北見市、網走市などから73名の応募があり、抽選で選ばれた23名の参加になりました。ホームページを見た神戸市、横浜市からの参加がありました。

当日は現地へ近づくと晴れていた空が霧に覆われていましたが、羅臼湖入り口は霧が晴れており、身支度をしてトレッキングを始めました。歩道沿いにはゴゼンタチバナの白い花やナナカマドの花と青い実が同時にあり、雪渓跡にはエゾコザクラの淡いピンクが可憐さを引き立てていました。

三の沼にはチシマミクリが水面に長い葉を漂わせ、ワタスゲが白い綿毛を付けていました。ハイマツの雄花や花の名前、湿原植物の遷移等の説明を受け、羅臼湖湿原展望台に着きました。

記念写真を撮っている間に霧に覆われ、昼食中も湖の姿が見ることができませんでした。それでも一瞬見るだけで嬉しんでいただけました。雲が無ければ知西別岳なども見ることができるのですが、昨年に続き全景を見ることができず、自然の厳しさを感じました。

帰りは来た道の折り返しです。笹がぬれ滑りやすくなった坂道を慎重に歩き、全員無事トレッキングを終えることができました。

参加者の皆さんに、自然豊かな緑濃い沼や湿原を楽しく散策していただきました。



三の沼を散策しています

第67回レクリエーション・in知床

『初秋の知床硫黄山を訪ねて』を開催

第67回森林レクリエーション・in知床を9月4日（木）に行いました。

今回の目的地である「知床硫黄山新噴火口」は、硫黄山の中腹にあります。硫黄山は、安政年間に4回の活動が記録されており、昭和11年の活動では、約20万トンもの硫黄を噴出し、カムイワッカ川は下流まで約1.4kmに亘り一大硫黄河になり、採掘の活況ぶりが「一夜に50万円、北見知床にわか景気」と新聞報道されたとの記録も残っています。

参加者は、62名の応募者の中から抽選で選ばれた、北見市のほか網走市、留辺蘂町、遠軽町、美幌町、地元斜里町からの男性6名、女性16名の計22名です。

当日は11時に現地に到着し、熊に出会った場合の対処法、登山用ステッキの扱い方などの注意・説明を受け、準備体操で体をほぐした後、一列になり、登山道を登り始めました。

途中、ミズナラ、ダケカンバ、ハイマツなどの特徴、用途を職員から聞き、カワラボウフウ、アカミノイヌツゲ、シラタマノキなどの植物・低木を観察しながら、1時間程で「硫黄採掘跡地」に到着しました。ここには、硫黄を採掘した当時の小屋跡などが残っており、参加者の皆さんは興味深きのぞき込むと共に、70年近く経った今でも、ほぞ・ほぞ穴がきれいに残る木材片を見て驚いていました。また、晴れていれば、ここからオホーツク海の大パノラマを見ることができると聞き、恨めしそうにガスがかかった空を見上げていました。

小休止後、新噴火口に向けて採掘跡地を後にしました。これより岩場になります。両手でしっかりと岩をつかみ、全身に力を込めて少しずつ登っていきました。途中、「ハイマツ、ミズナラ、イソツツジ、オンタデがまとまって生えているのは活火山である硫黄山の特徴」との説明を聞き、貴重な体験ができたことを喜んでいました。

最後の難関・砂れき地の登り坂も無事に克服し、「新噴火口」に到達しました。ここで、噴気を上げている第1火口を背景に記念写真を撮った後、昼食をとりました。

昼からは、来た道を足元に注意しながら降りました。途中、エゾヒグマがエゾアカヤマアリの食べるために岩を動かした跡や、わずかに残るコケモモの赤い実を観察しました。熊が食べたためコケモモの実が少なくなったことを知り、あわてて熊が近くにいないか周りを見る人もいました。登山口近くの樹林帯では、2頭の雌エゾシカが別れを惜しむように見送ってくれました。



新噴火口で記念撮影しました

3万人を超える人々で大盛況

—第24回しれとこ産業まつり—

9月28日（日）に産業まつりが開催され、センターからは①知床の動植物写真ハガキプレゼント、②丸太切り体験、③火起こし体験の催しで参加しました。

新たに実施した火起こし体験では、マイギリ式火起こし器を使い、目新しさも手伝って、一日中待つ人の列が絶えないほどの盛況でした。また、300枚用意した写真ハガキも、1人1枚に制限したにもかかわらず、2時間ほどでほとんどがなくなりました。



火起こしに最初に成功したのは小学生の女の子でした